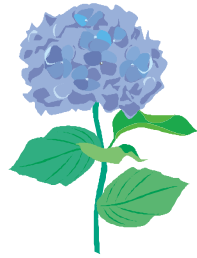


## 紫陽花



この二カ月間は例年になく雨続きだった。それも豪雨の日が多く、土石流や崖崩れに対する警報を伝える日が何日もあった。それがよそ事とも思えない気がするようになったのは、出水の鮎解禁の日に、鮎漁に誘って下さった岡田哲也氏の友人たちの中に、昨年土石流で甚大な災害を被った針原地区の二組のご夫婦がいたからである。

この雨には梅の実ばかりでなく、植木屋さんが折角袋をかけてくれた二十ばかりの我が家の桃の実も全て腐って落ちてしまった。きつと今年には野菜も蜜柑も不作なのだろうと思う。

その中、一際伸び伸びと育って輝いているものがある。それは菅蒲田の左の口に植えた紫陽花で、大きな手鞠が折り重なって花開いている。これは一昨

年短歌教室の先輩から頂いた植木の一本である。お寺の現在の住職の義母として、裏の隠居に心豊かに住んでいられる彼女が、気前良く金木犀や椿などとも下さったものだ。それらは植木屋さん三人がかりで掘ってトラックで運んでもらったほどのものだった。

去年は、刈り上げた古い枝から伸びた葉は僅かですほど大きくない花が申し訳のように三つばかり咲いただけだった。今年は丈こそ胸あたりであるが、横幅は両手を広げたほどにもなつて、近寄つて数えてみると三十ほども咲いている。日持ちのする花でも二三週間も咲き続けている。最初は白く小振りでもやがて澄んだ青になり、今は老女といった風情で薄紫をしている。おかしなことに後から咲いた花も薄紫である。一株に色々な段階の色があるのではなく、咲くときは先輩の色に合わせて咲いているのかと思う。

信州の私の実家の庭は、草花が殆どなかった。大きな石を配した泉水には、枝振りのよさが有名だつ

た老松が真中に乗り出していて周囲はツツジが多く整えられたあらさが七八本もあったろうか。落葉樹の少ない植え込みの庭であつた。花壇といつたスペースは作られていなかった。母屋の厠横には大きな洪柿があり、それが唯一落葉を舞わせていた。奥の隠居の裏には栗や柿もあり、高い桐の木が春には隠居の屋根に簷のように咲いたが、ツツジの他に祖父が花を楽しんでいたのは、せつせと手入れをしていた菊だけだつた。

もつとも紫陽花は信州には少なかつたように思う。寒冷で、夏も湿潤な気候ではないことが原因なのだろうか。しかし栃木の那須の松並木の両側は紫陽花街道であつたし、似たような気候なのではと思うと、これはもう郷土の人たちの好みの問題かと思う。

四十五年も前になるが、東京から夏休みに帰郷した大学生の私は、母から仕立ておろしの浴衣を手渡された。広げてみると、実物大の紫陽花が図案化された大柄の、当時としてはモダンなものであつた。私はとても気に入つて東京に持ち帰つた。それはつ

いには寢巻になり、まだそんなにくたびれてはいなかつたが長男のおむつにと変化した。

洗濯機もないその頃の梅雨ときは、固くしばつてもおむつの乾きは遅く、間借りしていた部屋に麻紐を十文字に張りめぐらして、万国旗さながらに干したものだつた。そして目を閉じると、青くほかしの入つた紫陽花の模様のそのおむつが何枚も連なつてかかっている部屋の様子が、亡き母の笑顔とともに懐かしく思い浮かぶ。

夫の故郷鹿兒島に帰り、毎月園芸の冊子を送つてもらつている。それを見ると紫陽花の品種改良はとても進んでいて、赤やピンクの美しい写真が並んでいる。しかし私には昔ながらの青い毬状の花がこれぞ紫陽花だと思えるのだ。とは言え去年の「母の日」に娘に注文して送つてもらつた「隅田の花火」という白い花の変形のものや、造園のとき植木屋さんが植えてくれた葉に斑の入つた藤色の額紫陽花も劣らず愛でているこの頃である。